

## 文学における温泉と医療 —フランスを中心に—

大橋 絵理

長崎大学言語教育研究センター

### **Spas and Healthcare in Literature – Focusing on France –**

Eri OHASHI

Center for Language Studies, Nagasaki University

#### **Abstract**

In the ancient Greek period, two opposite views of the hot spring treatment appeared: the first treated it as the miracle by the Olympus gods, while the other treated it as a subject of scientific enquiry, which the Hippocrates School supported. Afterwards, when the plague prevailed in the Middle Ages, Ambroise Palais, king's doctor, argued that the spread of the plague was the wrath of God against the corruption of man and banned the hot spring bath, for the reason that the poison entered into the body by bathing. It was also viewed with mistrust because it was an act favored by the heathens of ancient Greece. However, Montaigne and Rousseau, who disagreed with the doctors' assertions, practiced treatment with hot springs, and insisted on the importance of cleanliness by bathing. Their ideas became accepted gradually by the people, leading to a decrease in the infection of plague. In the nineteenth century, the doctors advertised that the spa treatments were good for health. The industrial revolution simultaneously caused health resort development, which made big money, and the authors such as Maupassant and Daudet who were interested in complex human relations, wrote the novels set in the spa resort. In this way, Spa resort has been inherited from the ancient times to contemporary as the important place of the controversy of medicine, and of the literary creation.

Key Words: Spa, Health, Literature, Medicine, Resort

## 1. はじめに

温泉は病気を癒す奇跡の泉として世界中で古代から神話と結びついてきた。例えば古代ギリシャ・ローマ時代では、アポロンとアスクレピオスが医神として信仰の対象となっていた。ゼウスの息子であるアポロンは、オリュンポス 12 神の一人で絶大な権力を有しており、予言、音楽、文芸の神であると同時に、病にかかわる神でもあった。しかも、人間を一瞬で殺せる金の矢を持ち、疫病を伝搬させることも病を癒すこともできると考えられていた。アポロンはまた神託も司り、古代ギリシャで最も威厳があるのは、アポロン神殿で下されるデルポイの神託だと信じられていた。デルポイについては、アポロドーロスの『ギリシャ神話』で、次のように書かれている。「アポロンはゼウスとヒュブリスの子パーンより予言の技を学び、デルポイに来た。 […] 神託を守護していた蛇のピュトーンが、彼 [アポロン] が地の裂け目に近づくのを遮った時、これを退治し、神託をわがものとした」<sup>1</sup>。またブルフィンチの『ギリシャ・ローマ神話』では、山羊飼いがパルナッソス山の山腹で深い洞窟から出ていた特別な蒸気を吸った後、発した言葉を、付近の村人が神から靈感によるものだと思い、その蒸気が噴き出る場所に建てた神殿がアポロン神殿であると述べられている<sup>2</sup>。この山羊飼いが吸うことで神託を得たと考えられた蒸気とは温泉の蒸気であると推測される。

また、もう一人の医神アスクレピオスは、アポロンの息子である。アポロンはアスクレピオスの母親であるコロニスに裏切りに激怒して彼女を殺害し、その息子をケンタウロスのケイローンに預けた。その後、アスクレピオスはケイローンから医学と狩猟の技を学び、その後外科医となって、ゴルゴーンの右側からでた血を使って死者を蘇生させたと伝えられてきた。そのために、古代ギリシャではギリシャ全土に数多くのアスクレピオス神殿が建立されたと言われている。アスクレピオス信仰では、病人たちはこれらの神殿に赴き、沐浴し、神殿に宿泊した時に見た夢を神託だと信じていた。そして神官達は病人のために祈りや様々な魔術的な儀式、温泉への入浴による治療の指示等を行い病気を癒していたと伝えられている<sup>3</sup>。

さらに、ボルボとも呼ばれるギリシャ神話の中の月や魔術の女神ヘカテの原形は古代エジプトの蛙の顔をした水の女神ヘクトだと考えられている。ヘクトは天界の産婆として毎朝太陽神を産んだと伝えられていた。古代エジプトでは、蛙は卵を多く産み、その姿が胎児に類似していることから、ヘクトは出産、多産、復活を司る女神だとされていたのである<sup>4</sup>。ヘカテの権力は絶大で、ヘシオドスの『神統記』では、彼女はゼウスによって大地と海を授けられ、天でも特権を与えられていたので、人々は最初に彼女に供物を捧げ祈ると書かれている<sup>5</sup>。ボルボという名は、「沸騰する」という意味もあり、フランスのブルボンヌ、ブルボンヌ＝ランシイ、ブルブール等の温泉地の名前にもなっている<sup>6</sup>。例えば、19 世紀のヴィシーのポスターで描かれている女神

は、たいていヘカテ＝ボルボである。そのため古代ギリシャ・ローマ時代では、温泉が湧きでた場所で神に治療を祈願したり、回復を感謝するために供物を捧げるという行為は一般的だった。供物はしばしば小さな人形だったり、木に彫られた痛みがある部分、例えば目、足、手、胴体等の身体の一部であった。実際フランスのブルボンヌ＝レ＝バンやロシュの源泉付近では 1500 体の人形や 8500 にものぼるの身体の部分の形や破片が見つかった<sup>7</sup>。

しかし同時に古代ギリシャ時代にはすでに温泉を単なる神的な現象と捉えずに、科学的なものだとみなす思考も生まれていた。それでは、温泉と医療の関係はどのような変遷をたどり現代まで継続してきたのであろうか。

## 2. 温泉における神話と医学

紀元前 8 世紀ごろ書かれたホメロスの『イリアス』の第 4 巻では、アスクレピオスの息子マカオンがスパルタ王メネラウスの身体に受けた矢を抜く。彼は「非情の矢のあたった傷口を見ると、血を吸いだした後、かつてケイローンが彼の父に好意の印として送った痛みを鎮める妙薬を手際も鮮やかに傷口に塗る」<sup>8</sup>と書かれている。ホメロスはアスクレピオスを神とは考えずにテッサリアの豪族としているので、当然マカオンは人間ということになる。この記述から病や傷をいやすのは、神にだけ可能なのではなく人間にも可能だという考えが広まっていったのがわかる。

また「医学の祖」と言われるヒポクラテスは紀元前 460 年頃ギリシャのエーゲ海の小さな島コス島で誕生した。彼は、アスクレピオスの名がついたアスクレピアドという世襲制の医療従事者の集団に属していたと考えられている。実際、ヒポクラテスと同時代の人物であるプラトンの対話編『パイドロス』では、ソクラテスとパイドロスの対話の中に、「アスクレピアダイの医学者ヒポクラテスの言葉を信じるならば」<sup>9</sup>という言葉がでてくる。ヒポクラテスの死後 100 年たって編纂されたと言われている医学書『ヒポクラテス全集』に掲げられている「ヒポクラテスの誓い」という宣言には、最初に医学の神としてアポロンとアスクレピオスの名が告げられている。さらにコス島のアスクレピオス神殿には温泉が湧きでており、ヒポクラテスも温泉の効果を幼い時から知っていたと言われている。全集の中の「空気と水と場所」という章では鉱泉の重要性、「婦人の自然性」では女性患者に多量の温浴を取らせることの必要性が述べられ、温浴や蒸気浴の身体への効果が何度も言及されている<sup>10</sup>。

しかし古代ローマ時代になると温泉に対する人々の意識に変化が現れた。皇帝達は治療のためよりも人民の関心をひくために豪華な温泉施設を次々と建設し、貴族たちは競って屋敷に贅沢な浴場を作り饗宴を楽しんだ。その贅沢さがいかに行き過ぎたものであったかを、セネカがルキリウスへの書簡で非難している。彼は、およそ 200 年前つまり紀元前 185 年～183 年頃古代ローマの英雄の一人であるスキピオが晩年を

過ごしたりテリウスの家を訪問した。書簡で、セネカはスキピオが、「自分の意志による追放によって退き、国の負担を軽くした心の偉大さ」<sup>11</sup>を称えたのち、彼が住んでいた質素な家について述べるが、特にセネカに感銘を与えたのは浴場であった。彼はスキピオが使用していた簡素な浴場を自分と同時代の人々の浴場と比較して次のように語る。

今時誰がそのように入浴することに堪ええるでしょうか。〔…〕もし、浴室の円天井がガラスで覆い隠されていなかったら。またもし、かつてはどこかの神殿の稀な見ものだったタソスの大理石が、わが家の水槽一つまりわれわれが浴室で多量の汗を流してからからになった体をそこに沈める—その水槽を取り巻かなかったなら。もし水を銀製の管の栓から注がなかったならです。

〔…〕スキピオのこの浴室には、ちっぽけな、窓というよりはむしろ裂け目といったものが、石の壁の中に切り取られてあります。それは壁の作りを損傷することなく光線を取り入れるためでした。ところが、現在は、もしも浴槽が一日中広々とした窓から太陽を受け入れるように按配されていなければ、浴室は油虫用だと言われます。また、もし入浴と同時に日焼けしないならば、さらに浴槽から陸や海を眺められないならばです。<sup>12</sup>

セネカは狭く暗く一切の飾りがない浴室に入浴するスキピオを、精神面において称えている。セネカの時代には入浴は快樂の追及のためのものになっており、裕福な人々は入浴しながら日光浴をし、宴会を繰り広げ、娼婦たちと戯れた。ローマ帝国を救った偉大な將軍スキピオは自ら耕した畑の泥で汚れた手足を洗い清潔さを保つために風呂に入ったのであり、同時代人達のように身体に塗った香料を練りこんだ高価なオイルを洗い流すためではないとセネカは主張する。彼は浴場や入浴という概念を通して、同時代人達が200年前の同じローマ人は文化的に遅れているという考えの傲慢さやその生活を厳しく非難したのである。このような理論は、換言すれば古代ローマ時代には入浴という行為が、単に生活だけでなく思考や倫理という精神性といかに深くかかわっていたかを示すものだと言えよう。

### 3. 入浴の否定

しかし、その後セネカが非難した贅沢さが大きな原因のひとつとなって古代ローマの温泉を含んだ浴場は、キリスト教の広がりとともに次第に衰退していく。もちろんキリスト教世界において温泉が全面的に否定されているわけではない。確かに温泉の記述は『旧約聖書』にも見られる。創世期第24章には「ジベオンの子らは次のとおりである。すなわちアヤとアナ。このアナは父ジベオンの驢馬を飼っていた時、荒野

で温泉を発見した者である」と記されている。聖書に温泉が発見されたと書かれているということは、その発見が貴重であり、神聖さと結びついているからだと考えられる。また、『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」第 5 章第 3-4 節では、盲目や病気の人たちが、治癒力があるとされるエルサレム外壁の前の羊の門のそばにあるベトザタ池に身体を横たえていたとある。ベトザタとは「恵みの家」という意味で、この池は定期的に鉱泉が湧き出る間歇泉だったと言われている。

しかし、同時に『新約聖書』には入浴に対する拒絶感の萌芽が見られる。「マルコによる福音書」第 7 章第 1-13 節では、イエスの弟子が手を洗わず食事をしたことにファリサイ派の人々が驚愕したと書かれている。なぜなら、「ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆昔の人の言い伝えを固く守って、念入りに手を洗ってからでない」と食事をしていないからである。また、「ルカによる福音書」第 11 章 37-54 節では、身を清めずに食事をしたイエスに対して、ファリサイ派の人々が「杯や皿の外側はきれいにするが自分の内側は強欲と悪意にみちている」と批判する。このような清潔さと関連するユダヤ教の習慣に反しているとも見えるイエスやイエスの弟子の態度は、古代ローマの人々が愛好していた浴場という場所の否定にもつながっている。キリスト教はキリスト教以外の宗教を異端として徹底的に排除していった。温泉は病をいやす奇跡を起こす場所として古代ギリシャの神々の彫刻や絵画が飾られていることが多かったため、キリスト教にとっては異教徒達が集う場所であるという認識となっていたのである。またその豪華さは墮落へと結びつくものだと批判の対象となった。

さらに、浴場の衰退の原因のひとつに中世のペストの流行があったことも知られている。ペストによってヨーロッパでは 2000 万から 3000 万人が亡くなったとも言われているが、その凄まじさは文学作品の中でも語られている。14 世紀に書かれた『デカメロン』はペストが流行したフィレンツェの郊外の邸宅に男女 10 人が逃れ、ペストの脅威を振り払うため面白い話をお互いに出し合おうという提案から始まる。そのため『デカメロン』の第 1 日目には、いかにペストが猛威をふるい人々が混乱したかが描かれている。

先ほど申し上げた年〔1348 年〕の春のはじめ頃には、疫病はそのいたましい威力を驚嘆するばかりの方法で示しはじめました。それは、鼻血がでたら死の宣告だった東洋のとは違って、罹病の初期に、男も女も同じように、股のつけねか腋の下にこわばった腫瘍ができて、そのうちのある者は、普通の林檎ぐらいに、他の者は鶏卵ぐらいの大きさになり、またある者はその数が多く、他の者は少ないのです。しもじもの者はこれをペストの腫瘍とよんでおりました。〔…〕

このペストの性質ときたら、次から次へと伝染することにかけては、ものすごい力を持っておりまして、それが人間から人間へ伝染するだけならまだしものこと、

こんなこともございました。[...] つまり、患者かまたはその病気で死んだ品物に人間以外の他の動物がふれると、それに病気がうつるだけではなく、またたく間にそれが死んでしまうのでした。<sup>13</sup>

上記の引用にも見られるように、患者のみならず動物でさえ持ち物に触れただけでも感染すると考えられていたペストを予防することは当時では不可能であった。彼らは神にすぎるしかなく、そのため『デカメロン』の語り手達が出会うのもミサが行われた教会に設定されている。

そのような状況の中で、医師達はなんとかペストの感染をくいとめようとした。1568年にはシャルル9世の筆頭外科医であったアンブロワーズ・パレが、共同浴場を禁止した。パレは1582年に執筆した『ミイラ、一角獣、毒およびペストの説』の中で、「ペストは神の怒りから生まれた病である。それは猛々しく、嵐のようで、性急で、耐えがたいものである。さらに、恐ろしく、感染し[...] 人間や、動物や植物というあらゆる生命の死を招く敵である」<sup>14</sup>と断言する。彼はペストの広がりや人間の墮落に対する神の怒りであると主張する。またペストをくいとめるためには、川や泉に注意し、傷んだ食べ物や食わず、道路や公共浴場を封鎖し、のら犬やのら猫を殺すように指示する<sup>15</sup>。さらに「蒸し風呂と共同浴場は閉鎖すべきである。なぜなら、入浴後は、すべての肉や器官が柔らかくなり、細孔が開き、ペストの毒気があつという間に身体に入ってきて、すでに、何度も見てきたように、すぐに死に至るからである」<sup>16</sup>と忠告する。

国王の専属医師であったテオフラスト・ルノーも、「医師の診断か、緊急な場合以外は入浴は単に不必要なだけでなく人間に害を与えるものである。入浴は身体に極度の疲労をもたらし、大気中の悪い空気が身体に入ってきて一杯になり、病気を引き起こす。[...] 入浴は頭を蒸気で一杯にする。また神経と靭帯を緩める敵であり、そのため痛風の人たちは入浴後痛みを感じるのである。また母親の体内にいる子供も殺してしまう」<sup>17</sup>と述べた。古代ローマの人々が豪華な浴場でふけた遊びや快樂の数々は、異教徒的でキリスト教の神の怒りをかうものであるという考えだけでなく、入浴により毛穴から病原菌が入り、胎児まで殺してしまうという国王の医師達の主張によって、温泉は避けるべき場所だという考えが広まることになったのである。

#### 4. 貴族と温泉保養地

しかし、ペストの脅威が下火になると、医師達の主張にもかかわらず再び温泉の効果が目に見えるようになる。フランソワ1世の姉であり、ヴァラン王エンリケ2世の妻であったマルグリット・ド・ナヴァールは『デカメロン』に感銘を受け、『エプタメロン：7日の物語』を執筆した。内容は『デカメロン』の手法が踏襲され、嵐の

ために修道院に足止めされた 5 人の女性と 5 人の男性からなる旅人たちが、その 7 日間にそれぞれ物語を語るというものである。マルグリット・ド・ナヴァールが亡くなったため、未完で終わってはいるが、修道院の場所はコトレ温泉の地方に設定されている。コトレは 8~9 世紀ごろ聖サヴァンがピレネーの溪谷に隠修道士として暮らし、様々な奇跡を起こしたことから多くの巡礼者が訪れるようになった場所である。そのためそこに修道院が建設され、その後「コトレ病院」も併設され、1059 年から 1078 年にかけては温泉も整備された。このように聖人と結びつき、修道院が運営していたことからわかるように、コトレの温泉は神の奇跡として病人を癒す力があると考えられていた。

『エプタメロン』のエピローグは次のように始まる。

9 月のはじめになると、ピレネー山脈にある温泉の効き目があらわれてくる。フランスやスペインそのほかの諸国の人々が、コトレ温泉場に集まって、鉱泉を飲んだり、鉱泉に浴したり、あるいは泥土に浸るために来た。温泉の効き目は驚くばかりで、医者から見放された病人も、すっかり回復して帰国するほどであった。

さて、私はこの温泉の有様や効き目のことをかれここで言うつもりはなく、これから物語にかかわりのある点だけを、お話ししておきたいのである。

人々がすっかり健康を取り戻し、いよいよ帰国しようと思っていたその矢先、ものすごい大雨が降りだしてきて、神様がノアになされた約束をお忘れになり、またもや、もう一度、世界を氾濫させ、水浸しにでもしようとも思っておいでになるのではないかと思われたほどだった。<sup>18</sup>

「Cauderès コドレ」は今日では「Cauterets コトレ」と呼ばれている。コトレはマルグリットの夫ナヴァール王のアンリ・ダルブレが治めるナヴァール王国の一地方であった。王はコトレ地方の美しい自然が非常に気にいっており、妻に健康のためにコトレを訪れるように勧めたのである。彼女は 1541 年 5 月に夫とともにコトレの温泉を訪ね鉱泉を飲み、温泉やその成分を含んだ泥に浸った。マルグリットは重症の鼻カタルとリューマチにより特に冬はベッドから起き上がれず、多くの医者にかかったが治療に効果がなく治癒を期待して温泉に向かったと言われている。その後、1546 年 9 月に彼女はコトレを再訪し、最後に訪ねたのは 1549 年の 5 月で、夫や娘夫妻と離れての療養だったが、同年の 12 月に亡くなった。晩年、彼女は半身が麻痺していたと言われており、何度もコトレを訪れたのは、温泉治療によってある程度の効果が得られたからだと考えられよう。さらに、マルグリットは不妊に悩んでいた娘のジャンヌ・ダルブレにも、コトレでの温泉療養をすすめている。そして、療養の成果か、その後ジャンヌはのちのアンリ 4 世を授かったのである<sup>19</sup>。ペロー童話の「眠れる森の美

女」でも「昔々あるところに王様と王妃様がいました。二人はなかなか子供にめぐま  
れなかったので、世界中の色々な温泉に行きました」<sup>20</sup>と書かれており、温泉は不妊  
治療にも効果的であると信じられていた<sup>21</sup>。

16世紀ではヨーロッパで多くの温泉を巡った人物の一人にモンテーニュがいる。  
彼は長年腎臓結石に苦しんでいたにもかかわらず、医者に対して強い不信感を抱き、  
『エッセー』の中で医学に対する懐疑を以下のように述べている。

第一に、経験によって、私は医学を恐れている。私が知っているかぎりでは、医  
学の管轄のもとにある人々ほど、病気になるのが早くて、治るのが遅い人種はいな  
いのである。食事療法という拘束のせいで、彼らの健康そのものがむしばまれ、そ  
こなわれている。医者たちときたら、病気を支配するだけでは満足せず、健康をも  
気にしてしまって、我々が一日中、彼らの権威から逃れられないようにする。とに  
かく彼らは、こちらがいつも完全に健康であっても、将来の大病の論拠を引っ張り  
出してこようとするのではないか。<sup>22</sup>

モンテーニュは、医術への反感は「遺伝的」、つまり彼の父親も同様の考えであった  
と言う。医学が発達していない時代には、医師たちにたいして不信感を持っている者  
も多かった。そのようなモンテーニュが病気の苦しみから逃れるために選択したひと  
つの方法は様々な温泉を巡る旅行だった。

私は旅行の機会に、キリスト教国の有名な温泉はほとんど回ってみた。数年前か  
らは、湯治療法も始めた。そもそも、わたしは入浴が健康にいいと考えているし、  
毎日身体を洗うという、その昔は、ほとんどの国において、広く守られ、現在もい  
くつかの国で守られている習慣が、我が国では失われたために、われわれの健康に  
少なからぬ不調をももたらしめているとも思っている。われわれの皮膚を垢でかさか  
さにして、毛穴をふさいでおくのが身体に悪くないなどということは、とても考え  
られないのだ。<sup>23</sup>

入浴によって清潔になることは、健康を促進することでもあるというモンテーニュの  
判断は、入浴すると毛穴が開いて病気に感染するという王の医師達の理論と反対であ  
り、非常に近代的でもある。さらにモンテーニュは、温泉水の効果について次のよう  
に語る。

温泉を飲むことは、第一に、幸いにも、私の口に合わないということは全然ない。  
第二に温泉水は自然で、単純なものであるから、たとえ無駄だとしても、少なくとも



も危険はない。温泉場に集まってくるあらゆる状態や体質の無数の人々が、いい証拠ではないか。<sup>24</sup>

温泉療法で結石の病が完治したわけではないが、ほぼ一年かけて彼がヨーロッパの温泉地を巡ったからには、ある程度の効果を実感できたのではないかと推測される。彼は 1580 年から 1581 年にかけて、ドイツからイタリアまで数多くの温泉保養地に滞在ながら旅行し、その体験を『旅日記』に記している。中でも、イタリアのデラ・ヴィラ温泉には 1581 年の 8 月 14 日から 9 月 12 日までほぼ一か月間滞在し、そこでの治療法についても次のように書いている。

午後に私は入浴した。それは、この地方の規則に反することで、ここでは一つの作用はもう一つの作用を妨害すると言われているからである。飲用は飲用だけ続け、入浴は入浴で続けるというふうに、別々でするのがよいとしている。人々は 8 日飲んで 30 日入るとか、こちらの湯（ラ・ヴィラ温泉）を飲み、向こう側の湯（コルセナ温泉）に入るとかする。<sup>25</sup>

この文章から温泉に浸ることよりも温泉水の飲用が重視されていることがわかる。飲用は多くの人々が苦しんでいた胃炎に効果的で、食欲が増進すると考えられていた。モンテーニュは各保養地で特に温泉水を何杯飲んだか、それによって結石がどのように排出されたかを克明に記している。医学的な治療が確立していない時代では、温泉という自然のエネルギーで病を癒す方法は病人にとっては非常に重要なものであった。

その後、17 世紀になると多くの王族や貴族が温泉治療にしばしば赴くようになった。例えばピレネー山脈にあるバレージュ温泉では、1630 年に鉱水をひいた大きな浴槽と小さな浴槽が作られた。その評判のよさからルイ 14 世とモンテスパン夫人の間にできた足の不自由だった息子が湯治を行い回復したと言われている。また、リューマチに苦しみ身体が歪曲していたスカロンはドービネ嬢と結婚する前にかなり長い間バレージュに滞在していた。ある程度の効果があったため、アメリカへ赴く計画があった時も、同地で温泉保養をしようと思っていたことが書簡に記されている。彼はサラザンに「バレージュに春に行くことができれば、ヴィジェ嬢に会うためにあえてボルドーへ行ったでしょうが。それが私が考えていた計画でした。しかし、運命は一月後に、私をアメリカへ連れて行ってしまいます」と書き送っている<sup>26</sup>。

病気のために顔の形が変わるといふ若い女性にはつらい病にかかっていたラファイエット夫人も 1657 年に親しくしていた作家のジル・メナージュにヴィシーから次のように書き送っている。「私はこの温泉地で毎朝 14 杯も世界で一番美味しくない熱

い鉱泉を飲みました。これで痛みが減るといいんですが。ここは、医者では治療できない人を送る温泉です」。また別の時には「私はここで首までお湯につかっています。でも、体調がよくなりませんので、明日はここを出ると思います」と報告している<sup>27</sup>。

ほぼ同時期にセヴィニエ夫人もヴィシーに治療のため滞在していた。彼女がヴィシーから娘グリニャン夫人へあてた書簡は様々なサロンで評判を呼んだ。当時は書簡が個人に宛てたものでも、サロンで全員の前で声に出して読まれたり、回覧されることが一般的な習慣となっていた。セヴィニエ夫人自身も自分が宛てた相手だけではなく様々な人達にも読まれることを前提に手紙を書いていたことを考慮すると、いかに温泉療養が当時の貴族たちの間で関心が高かったかがわかる。彼女は1676年の5月末から6月半ばまでと1677年9月3日から25日までヴィシーに滞在し克明に治療法を手紙に書き綴った。彼女はユーモアを持って「それは煉獄のリハーサル」のようなものだと語り、具体的にどのような治療かを述べている。

あなたの哀れな身体はどこかに想像できるかぎりの沸き立つほどの熱いお湯の噴き出しがかかるのです。まず身体中に警報を発して、動物精気をすべて活動させます。それから以前に痛んだ関節の治療に専念するのです。[...] すべてに耐えなければいけません。すべてに耐えても決してやけどをすることはありません。それから暖かいベッドに入ったらたっぷり汗をかきますと、ほら、治るといふわけです。<sup>28</sup>

温泉水を身体に浴びることは、血行を促し同時に皮膚病を癒す効果があることも知られていた。書簡から鉱泉の飲料だけではなく、シャワー等様々な温泉を使った治療法が試みられていたのがわかる。セヴィニエ夫人はほぼ毎日娘にヴィシーでの温泉治療の様子だけではなく、自分が出会った人々、彼らとの会話、訪問、散歩など、日常生活を詳細に書き送った。それはひとつの作品とも言えるもので温泉保養地が創作を育む場ともなっていると言えるだろう。

## 6. 温泉保養地の発達

フランスでは16世紀に王の首席待医であるラ・リヴィエールが「各州に温泉監督官(医師)を任命し、自分の任務である監視や調査、活動のコントロールなどを補助させた。[...] 温泉監督官は源泉を発見し、特性を検査し、それらを保護し、温泉施設の良い働きを監視するという役目を負っていたので、その任務は重要であった」<sup>29</sup>。その後国王が18世紀に「王立医学委員会」という温泉に関する行政機関を特別に設置したことからもわかるように、温泉は国による統治がなされ、温泉療養は貴族の間で病気の治療法として認知されていった<sup>30</sup>。そのため、1789年のフランス革命以降は、温泉保養地を利用していた王侯・貴族の階級がいなくなったことから、保養地は

打ち捨てられ、衰退していった。

さらに 18 世紀には感染症の広がりを防ぐために、その原因と推測される不快な臭気を空気の循環によって追い払わなければならないという考えが医師達の間で支持されるようになった。そのため空気の循環は身体の清潔さと強く結びついていると信じられ、清潔な布で体をこすり、空気に体をさらす乾浴が最も健康によいと思われていた<sup>31</sup>。だが、そのような考えを否定する哲学者もいた。都市より田園、束縛より自由、贅沢より簡素さの美点を主張したルソーである。彼は、教育論である『エミール』の中で、モンテーニュ同様医師に対する不信を語る。そして「医学の中でただひとつ有益な部分は衛生学」<sup>32</sup>であり、子供の身体を拭くだけでは不十分だと言う。「子供はたびたび洗ってやりなさい。子供が不潔になっている時は洗ってやる必要がある時だ。拭いてやるだけだと子供を苦しめることになる。[...] この沐浴の習慣は中断してはならない」<sup>33</sup>。自然であることや子供の自由を重んじる彼の教育論は、それまでの慣習に疑問を抱いていた一般の人々だけではなく、王侯貴族にも多大な影響を及ぼした。

その結果、19 世紀になると「清潔」に対する概念が大きく変化した。子供の教育に役立つ児童書として非常な評判をよんだ『二人の子供のフランス一周』では、12 章に「服装と清潔さの決まり」という題がつけられている。初めて行く村に到着する直前に、主人公の子供達は、知らない人に会う時には必ず清潔で身ぎれいにするよというエティエンヌお婆さんの忠告を思いだす。そうしないと浮浪者に間違えられるというのである。それで二人は「道のそばを流れているきれいな川に急いでいこう。そこで顔と手を洗おうよ」<sup>34</sup>と言い合い、さらにハンカチで服から埃を払い、髪をとかし靴を雑草で拭い村へ入っていく。このように、水によって身体を清潔に保つことは、社会で一個人として認められるのに必要不可欠であるという子供への教育は、その後社会全体の共通理解ともなっていたのである。

また 1860 年にナポレオン III 世は鉱水の衛生状態を管理するために「利用されている源泉の位置するあらゆる場所は、十分な監視と施設の活用具合に責任を負う監督医によって監視されなくてはならない」<sup>35</sup>と定めた。それにともなつて温泉保養地は医学的側面が強調されるようになり、個人シャワー室や治療室の充実が促進された。さらにパリから遠く離れた土地への移動が鉄道の発達によって容易になり、医師達がガイドブックや新聞で推薦した温泉地を多くの人々が訪れるようになった。ユーゲン・ウェーバーは、『フランス、世紀末』の中の「温泉療養者と観光客」の章で、温泉保養地は 19 世紀には海岸にさきがけリゾート地になったと指摘している<sup>36</sup>。その結果、人々をひきつけるために豪華なホテルやカジノが建設され、退屈を紛らわせるために演劇やコンサートが頻繁に催されるようになった。それによって純粹に治療のための人々に加えて、社交やバカンスのために温泉保養地を訪れる人々が増加していったのである。

そして作家達もこぞって温泉保養地へと出かけた。ゾラとミシュレは妻を連れて1884年にはモン＝ドレへ 1885年にはフォルジュ＝レ＝ゾーへ、ジョルジュ・サンド、シャトーブリアン、ユーゴーはコトレへ、1900年にはブルーストがエヴィアンへ赴いた。テーヌやナドーは治療というよりも旅行者として温泉保養地へ行っている。フローベールは1840年の8月から10月にかけてピレネー・コルシカ旅行を行ったが、その旅行記の中で温泉保養地を辛辣に批判している。「すべての温泉保養地は似通っている。温泉保養地にはどこでも鉱泉飲場、浴槽、舞踏会のための同じような部屋がある」<sup>37</sup>。また彼は『サランボー』執筆後1862年に母親の保養に同伴しヴィシーに赴き20日程度滞在したが、8月23日にアルフレッド・ボードリに次のように書き送っている。「母はヴィシーの鉱泉はとてもいいと思っている...それにしてもこの地方はばかげていてどうしようもなく哀れなやつらで一杯だ。これが、僕が抱いている感想のすべてだ」<sup>38</sup>。1863年もフローベールは6月から7月初旬にかけてヴィシーに滞在しているが、この温泉保養地に対する考えは翌年になっても変わらなかった。「私はヴィシー滞在をたいして楽しんでいません。ここでは、執筆する気になれないので、本を読んで時間を過ごしています。[...] ヴィシーはルーアンの人間や下品なブルジョワでいっぱいです。それで、外出する気になれません。ここで同じ階級の多くの知り合いに会いました。みんな、道で出会って世間話をしています」<sup>39</sup>。

このように、リゾートとしての開発が進んだ温泉保養地は非常に俗化されたものになっていった。ルベタンは『現代のコメディ』の中で当時大流行だったヴィシーでの療養者の状況を、皮肉を交えながらコミカルに描いている。「胃の痛みをおさえながら、顔色がすぐれない人々が輪になって陰鬱そうに、オーケストラがかなでる陽気な音楽を聴いている。悲しい雰囲気である。すばらしく設備が整ったこの砂漠、すばらしく充実したこの空虚な場所に立ち向かうためには、「大きな柵」や「病院」の鉱泉を喜んであるいは必要にせまられて飲まなくてはならない。私もまた、なんとか毎日何杯ものコップに入った鉱泉水を飲み干し、そのあとでやっと息を吸い込んだ」<sup>40</sup>。

このような状況を最も的確に描写したのはモーパッサンの『モントリオル』であろう。モーパッサンは療養のため1883年8月初旬、1885年の8月、1886年の7月から9月にかけてフランスのオーヴェルニュ地方のシャテル＝ギュイヨンに滞在し、その経験をもとに『モントリオル』を執筆し1887年に出版した。この小説は、アンデルマツト夫妻が妻クリスティアーヌの不妊治療のためにオーヴェルニュ地方にあるボヌフィュー温泉を訪れたところから始まる。温泉保養地滞在后クリスティアーヌは子供を授かるが、それは夫ではなくその地で出会った愛人ポールの子供だった。だが有能な事業家である夫のアンデルマツトは温泉開発に夢中で妻の浮気にも全く気付かない。彼の関心は有名なパリの医者たちをどのように買収してモントリオル温泉に呼び込むかということだけである。そしてこの小説の中に登場する医者たちは患者ではな

く金儲けにしか関心を持っていない。つまり、モーパッサンは温泉保養地を人間の隠された欲望や偽善を暴く場として描いているのである。

別の視点から温泉保養地を小説に取り入れた作家のひとりにドーデがいる。彼は梅毒の治療のために 1879 年にアヴラール、1880 年にはロワイヤ、1882 年にネリス、エクス=レ=バン、1885 年にラマルーというように温泉保養地を転々とした。ドーデは『イリュストラシオン』に 1881 年の 5 月 14 日から 7 月 16 日まで『ニューマ・ルメスタン』という小説を連載したが、その中の 11 章と 12 章にそれぞれ「鉱泉の町」「鉱泉の町 (続)」という章題をつけ、小説全体の八分の一を温泉保養地について描いている。この小説でドーデは、シャワーを浴びたり、朝晩鉱泉を飲んだり、蒸気吸引を一日に 4 回行う治療法や、家族、子供たち、老人、ブルジョワ、王族等様々な病人について細かく描いている。共通点は療養者が皆、死と向き合っていることである。ドーデは特に肺病を病んでいる貴族の母親に焦点をあてる。「ここには温泉保養地特有の悲しみがある。人々は自分の健康がむしばまれていることに向き合い、途切れることがない咳や、ホテルに閉じ込められることで気分が落ち込む。そして空気感染を避けるためにハンカチを口にあてている。[...] かわいそうな母親は肺病に効果があるというオ=ボンヌやモン=ドレというすべての温泉養地を巡ったのだ。しかし、このアリヴァールは他の保養地とは違う場所だ。もうどんな治療もきかない私やほかの絶望した病人たちしか送られてこない所なのだ」<sup>41</sup>。

さらに病気からくる激しい苦痛にさいなまれる日々を克明に描いた日記である『ラドゥル』はドーデの死後 33 年たって出版された。『風車小屋だより』に見られる純粋で素朴な人々を描いてきた作家が性病である梅毒にかかっていたということはイメージを損なうとして長年秘密にされていたのである。彼は、『ラドゥル』の中で 20 年間病気に苦しめられてきたと告白している。「僕は書いた。僕は苦しんだ。落胆。倦怠。いつも同じ歌。シャワー。ラマルーでは。去年から足の痛みがひどい。手すりなしでは階段を降りることができない。蠟を塗った床を歩くことができない。身体の一部の感覚がしょっちゅうなくなる。下半身が、足がもつれる」<sup>42</sup>。『ニューマ・ルメスタン』に書かれた貴族の母親と同様に彼は一縷の望みを託して、温泉を巡るがその効果が得られることはなく、彼の絶望は深くなるばかりだった。

『ラドゥル』にも出てくるゴンクール兄弟の弟ジュールも梅毒に苦しみ、パリでシャワーを使った水療法を試みていた。だがジュールの健康が悪化したために兄弟は 1867 年 7 月 3 日から 29 日まで、1868 年 6 月後半から 7 月半ばまでヴィシーのホテルマドリッドに、1869 年 6 月 10 日から 7 月 2 日にはロワイヤに滞在した。日記では「温泉保養地での生活、30 分ごとに鉱水を飲む、ホテルから鉱泉飲み場までの散歩、規則と中断の一日、治療の規律」<sup>43</sup>と治療方法が淡々と語られている。また、彼らの日記から温泉保養地にイギリス人、イタリア人、スペイン人など様々な国籍の

人々やあらゆる年齢層、様々な階級の人たちが一堂に会していることがわかる。1868年6月21日にはヴィシーについて「この鉱泉は夜を揺さぶり、悪夢に陥れ、人生での悪い記憶や苦痛に満ちた記憶を思い出させる。それは不安とエロティスムが混ざった特殊な感覚だ」<sup>44</sup>と述べ、必ずしも彼らにとって温泉保養が精神的安定に結び付いていなかったことがわかる。

このように、19世紀には多くの人々が治癒を求めて温泉保養地向かったが、奇跡的な効果を得たと感じることはほとんどなくなっていった。

## 7. 終わりに

その後近代医学の発達とともに温泉保養地を訪れる人々は減少していったが、興奮した精神を鎮めるためという目的で温泉療養に行くことは勧められていた。例えば、ジッドは、『一粒の麦もし死なずば』の中で、精神錯乱を装っていた中学生の自分に医者達はラマルー温泉に行くことを勧めたと書いている。「上ラマルーの浴槽は古くローマ時代までさかのぼるものと僕は思う。とにかく原始的だ。だから、僕は好きでもあった。[...] この一回目の湯治のあとに行われた医者の方の立会いの診察は、ラマルー温泉が僕に効いたと認めた。場合によっては、秋にもう一度行ったらよかろうという結論になった。[...] 秋になるまでの間、僕はジェラドメールへ灌水浴をやり送到了」<sup>45</sup>。ここでは、温泉治療がと海水治療が同時に行われているのが見てとれる。温泉保養地は基本的に山間にあり都市部から遠く、そこでの一か月から二か月の滞在は費用がかかったので大部分の利用者は富裕層だった。しかし、工業化が進み労働者が増加するにつれて、人々はもっと手近で経済的な保養地を求めるようになり、それが海浜保養地を生み出した。温泉地と比較すると、海岸はパリやロンドンから近い場所に、それぞれの地形の特徴をそなえながら多く見いだされ、子供たちにとっては遊び場として適しており家族で楽しむことができた。また、医者達もこぞって海水は殺菌力が強いので病気の治療効果があり、広い空間が開ける海岸は身体にも精神にもいいと主張した。さらに、温泉とは異なって古代ギリシャ時代から神々が生まれ、支配してきた海の神秘性、また生物だけでなく人間にも生きる糧を与えた海の実用性という多様な魅力によって、流行は急速に温泉保養地から海岸保養地へと移行していったのである<sup>46</sup>。

しかし、温泉保養地はまた別の開路を見出している。20世紀に近づくとともに、鉱泉水はミネラルウォーターとして瓶詰め販売され、日常生活の飲用水として現代にいたってもその消費量は全世界的に大幅に増加している<sup>47</sup>。さらに今後の人口増加による水質汚染の可能性から、健康に不可欠な鉱泉の重要性はますます増大していくであろうし、複雑な社会構造からくるストレスを減少させる場として温泉保養地は形を変えながらも存続していくと予測される。

註

- 1 アポロドーロス、『ギリシャ神話』、岩波書店、2016年、34頁。
- 2 トーマス・ブルフィンチ、『ギリシャ・ローマ神話』、野上弥生子訳、岩波書店、1978年、377頁。「デルポイのアポローン神殿が建つ位置を考えていただきたい。荒々しい溪谷に、しかもどうやら岩の裂け目の上に建立されていたのである。カソティスの泉水が神殿の基礎部分をぬって流れている。[...] 流れる水の豊かさが、聖域における雰囲気と生命の重要な要素であった」（カール・ケレーニイ、『医神アスクレピオス：生と死を巡る神話の旅』、岡田素之訳、白水社、2012年、47頁）。
- 3 ケレーニイはアスクレピオスの聖域は「ある時は高尚な、またある時はより強烈な夢の幻視として体験されるような、直接的で赤裸々な出来事による治療そのものに通じる道であった。しばしば神は夢のなかでみずから処置することがあった」（同書 57 頁）、また「人々は最初のアスクレピオス神殿をアポローン・キュパリオスの林苑に建て、それを徐々に拡張して治療施設にして、そしてコス島の医師達が先祖伝来の遺産として祭祀によって維持してきた治療の神秘的で神々しい源泉を、病に苦しむ者たちのために」（同書 87 頁）役立てたと指摘している。
- 4 Barbara. G. Walker, *The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets*, Harper & Row, 1983, pp. 378-379. バーバラ・ウォーカー、『神話・伝承事典』、山下主一郎主幹、青木義孝他訳、大修館書店、1988年頁参照。ヘケトはクヌム神の妻の一人であり、クヌムがロクロを使って作り上げた子供の人形に生命をもたらす役割を果たしていると言われている。
- 5 ヘシオドス、『神統記』、廣川洋一訳、岩波書店、1984年、55-60頁。
- 6 Michel Jalatel, *La saneté par les eaux : 2000 ans de thermalisme*, L'instant, Durable, 1983, p.14.
- 7 *Ibid.*, pp. 16-17.
- 8 ホメロス、『イリアス』（上）松原千秋訳、岩波書店、1992年、121頁。『知らぜらるヒポクラテス —ギリシャ医学の潮流—』、二宮陸雄、藤原出版、1983年参照。
- 9 プラトン、『パイドロス』、藤沢令夫訳、岩波書店、1967年、148頁。
- 10 ヒポクラテス、『ヒポクラテス全集』、今裕訳、東京：名著刊行会、1978年参照。ヒポクラテスは、温泉は効果があるので、病気によっては健康に悪い場合もあることを述べている。
- 11 セネカ、『道徳書簡集（全）—倫理の手紙集—』、茂手木元蔵訳、東海大学出版会、1994年、368-369頁。
- 12 同書、369-370頁。
- 13 ボッカチョ、『デカメロン』、柏熊達生訳、筑摩書房、1987年、20-21頁。

- 
- 14 Ambroise Paré, *Discours d'Ambroise Paré : avec une table des plus notables matières contenues esdits discours ; de la mumie, de la licorne, des venins et de la peste*, Gabriel Buon, 1852, p. 44.
- 15 Voir Véronique Montagne, « Le discours didascalique sur la peste dans les traités médicaux de la Renaissance: rationaliser et/ou inquiéter » in *Réforme, Humanisme, Renaissance*, 2010, Volume 70, numéro 1, pp. 103-112. Voir aussi Marzia Cacioni, « Peut on guérir Dieu? La colère divine dans l'œuvre d'Ambroise Paré » in *Les émotions de Dieu. Attributions, revendications, appropriations (XVI<sup>e</sup>-XVII<sup>e</sup> siècle)*, colloque internationale, 23-25 juin 2015, p. 4.  
<http://www.oquenosfazpensar.fil.puc-rio.br/index.php/oqnf/article/view/492>
- 16 Ambroise Paré, *op. cit.*, p. 536.
- 17 Théophraste Renaudot, *Recueil général des questions traitées et conférences du bureau d'Adresse ès-année 1633, 34,55, jusqu'à présent, sur toutes sortes de matières, par les plus beaux esprits de ce temps*, L. Chamboudry, Paris, 1656, 6 vol. in 8; vol. t. II, pp. 529-530.
- 18 Marguerite d'Angoulême (reine de Navarre : 1492-1549), *L'Héptaméron des nouvelles : de très illustre et très excellente princesse Marguerite de Valois, royne de Navarre*, Benoist Preuos, Paris, 1559, p. 2. 訳出にあたっては、マルグリット・ド・ナヴァール、『エプタメロン』、平野威馬雄訳、誠文図書、1982年を参照した。Voir Nicole Cazauran, *L'Héptaméron de Marguerite de Navarre*, SEDES, Paris, 1976.  
<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k523698/f4.image.r=.langES>
- 19 René Flurin, *Histoire de Cauterets des origines à nos jours*, Créer, 2006, pp.49-52  
Voir Frank, Félix, *Le dernier voyage de Marguerite d'Angoulême aux bains de Cauteret, sœur de François I<sup>er</sup>, avec sa fille Jeanne d'Albret aux bains de Cauterets (1549)*, E. Privat, 1897.
- 20 Charles Perrault, *Contes des fées*, Delarue, 1867, P. 23.
- 21 Jean Charles Chenu, *Éssai pratique sur l'action thérapeutique des eaux minérales*, vol. 1, 1840, P. 53.
- 22 Montaigne, *Les Éssais*, édition établie par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simon, édition des « notes de lecture » et des « sentences peintes » établie par Alain Legros, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, p. 804. 訳出にあたっては、ミシェル・ド・モンテーニュ、『エッセー 5』、宮下志朗訳、白水社、2013年を参照した。



- 23 *Ibid.*, p. 816.
- 24 *Idem.*
- 25 Montaigne, *Œuvres complètes*, textes établis par Albert Thibaudet et Maurice Rat, introduction et notes par Maurice Rat, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1962, p. 1270. 訳出にあたっては、ミシェル・ド・モンテーニュ、『旅日記』、関根英雄、斎藤広信訳、白水社、1983年を参照した。
- 26 J. G. Ballard, *Essai sur les eaux thermales de Barèges*, 1834, F. G. Levrault, Librairie-Éditeur, pp. 15-16.
- 27 H. Ashton, *Madame de Lafayette : sa vie et ses œuvres*, Cambridge at University press, 1922, pp. 56-57.
- 28 Madame de Sévigné, *Correspondances, tome II, juillet 1675 – septembre 1680*, texte établi, présenté et annoté par Jacqueline Duchêne, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », p. 303. 1676年5月21日、グリニャン夫人宛て。訳出にあたっては『セヴィニエ夫人からの手紙』、吉田郁子訳註、大学書林、1994年を参照した。
- 29 Philippe Langenieux-Villard, *Les Stations thermales en France*, Presses universitaires de France, coll. « Que sais-je ? », n° 229, Paris, 1990, p. 18. 訳出にあたっては、成沢広幸訳『フランスの温泉リゾート』、白水社、2006年を参照した。
- 30 *Ibid.*, p. 20.
- 31 Julia Csergo, *Liberté, égalité, propriété : le morale de l'hygiène au XIX<sup>e</sup> siècle*, Albin Michel, 1988, pp. 24-25. 訳出にあたっては、ジュリア・クセルゴ、『自由・平等・清潔—入浴の社会史』、鹿島茂訳、河出書房新社、1992年を参照した。
- 32 Jean-Jaques Rousseau, *Œuvres complètes IV*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1969, p. 271. 訳出にあたっては、ルソー、『エミール』、永杉喜輔、宮本文好他訳、玉川大学出版部 1982年を参照した。
- 33 *Ibid.*, pp. 277-278.
- 34 G. Bruno, *Le tour de la France par deux enfants : devoir et patrie*, V<sup>ve</sup> Eugène Belin et fils, 1889, p. 26.
- 35 Philippe Langenieux-Villard, *op. cit.*, p. 29. 温泉開発の歴史については、成沢広幸『フランス温泉療養リゾート沿革』、宮崎産業経営大学『経済学論集』第9巻第1号、2000年を参照した。
- 36 Voir Eugen Weber, *Fin de siècle : la France à la fin du XIX<sup>e</sup> siècle*, Traduction de l'anglais par Philippe Delamare, Fayard, 1986.

- 
- 37 Gustave Flaubert, *Œuvres de jeunesse*, édition présentée, établie et annotée par Claudine Gothot-Mersch et Guy Sagnes, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2001, p. 665.
- 38 Gustave Flaubert, *Correspondance III (janvier 1859-décembre 1868)*, édition établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1991, p. 240.
- 39 *Ibid.*, p. 332. 1863年6月末か7月始め、アメリー・ボスケ宛。
- 40 Bertall, *La comédie de notre temps : études au crayon et à la plume. III La vie hors de chez soi : l'hiver, le printemps, l'été, l'automne*, Paris Plon, 1876, pp. 600-601.
- 41 Alphonse Daudet, *Numa Roumestan : mœurs parisiennes*, Charpentier, Paris, 1881, pp. 190-191.
- 42 Alphonse Daudet, *La Doulou*, Paris, Fasquelle éditeurs, 1931, p. 54.
- 43 Edmond de Goncourt et Jules Goncourt, *Journal des Goncourt : mémoires de la vie littéraire III. (1866-1870)*, G. Charpentier, Paris, 1888, p. 140. ジュールはパリで水療法も行うが、それは彼にとって「苦痛と拷問」以外の何物でもなかった (voir *ibid.*, p.324)。訳出にあたっては、エドモン・ゴンクール、ジュール・ゴンクール『ゴンクールの日記』上、下、斎藤一郎訳、岩波書店、2010年を参照した。
- 44 *Ibid.*, pp. 216-217. Voir *L'esthétique des Goncourt*, Pierre Sabatier, Hachet, 1920, pp.154-155.
- 45 André Gide, *Souvenirs et voyages*, édition de Pierre Masson et annotée par Pierre Masson, avec la collaboration de Daniel Durosay et Martine Sagert, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2001, pp. 155-156. 訳出にあたっては、アンドレ・ジッド、『一粒の麦、もし死なずは』、新潮社、1969年を参照した。
- 46 Voir Alain Corbin, *L'avènement des loisirs (1850-1960)*, Édition Aubier, 1998.
- 47 山田登世子、『リゾート世紀末－水の記憶の旅－』、筑摩書房、1998年参照。